

未来ノート

-202Xの君へ-

水泳

まつもと かつひろ
松元克央

実は野球のため

日本一がサボる

一途のスイッチ

名伯楽とともに

両親のすすめ 嫌々だった

日本人が苦手としてきた種目で、五輪のメダルをつかみ取れるかもしれない。

そんな期待を抱かせてくれるのが、競泳男子自由形の松元克央(23)＝セントラルスポーツ＝だ。昨年あつ

た世界選手権の2000メートルで銀メダル。海外勢に見劣りしがちなパワーとスタミナの両方を求められる種目で、日本選手が表彰台に上るのは五輪、世界選手権を通じて初の快挙だった。

日本のトップ選手の多くが物心つく前からプールで水に親しむなか、松元が水泳を習い始めたのは5歳の

とき。両親のすすめで、東京都葛飾区にある実家近くの金町スイミングクラブへ通うようになった。ちょうど、父・達也さん(54)から野球の手ほどきを受け始めたころだ。「野球に必要な基礎体力を、水泳でつけさせたかったみたい」ところが、肝心の野球が

すっかりこなかった。「ボールをトンネルした記憶くらいしかない」。達也さんも「球を投げれば、右手と右足が同時に動く。バットにボールが当たらない。センスは感じられなかった」。東京ドームでキャッチボールをするイベントへ連れていっても、すぐに飽きて、人工芝で遊び始めるような子どもだった。

指導を始めて1年ほどしぼんだ。母の夏江さん(58)は「せつかく習い始めたのだから……」。野球をやめるかわりに、水泳は続けることに。平日午後の練習に加え、週末には朝練習が待っていた。プールへ向かうのを渋る松元を、無理やり起こして連れて行ったこともある。

松元は気乗りがしていなかった。「自分から『やりたい』と、始めたわけではない。やらされているという気持ちが強かった」。練習が終わると、ぬれた体のまま服を着て、一目散にプールを後にした。「嫌々泳いでいたから、その場にはいりたくなかった」。異様な光景は、同じクラブに通う子どもたちの間でも話題になった。



水泳を始めたばかりのころの松元克央＝家族提供

2019年世界選手権の2000メートル自由形で銀メダルの松元克央

野球の道を進んで欲しいという達也さんの願いは、

指導を始めて1年ほどしぼんだ。母の夏江さん(58)は「せつかく習い始めたのだから……」。野球をやめるかわりに、水泳は続けることに。平日午後の練習に加え、週末には朝練習が待っていた。プールへ向かうのを渋る松元を、無理やり起こして連れて行ったこともある。

(清水寿之)

◆「未来ノート」スクラップブックは、全国のASA(朝日新聞販売所)でお配りしています。インターネットの特設ページではイベントやスクラップブックについて詳しく紹介しています。「未来ノート 朝日新聞」で検索してください。